平成25年度授業シラバスの詳細内容

科目名(英)	感性学(The Quest for Sensitivity)			授業コード	A028251
担当教員名	伊藤　研、杉浦　嘉雄、清水孝子				
配当学年	2	開講期	後期		
必修・選択区分	選択	単位数	2		
履修上の注意または履修条件	身の回りで起こるさまざまな出来事を、好奇心を持って見つめる努力を続けてください。				
受講心得	本講義は「目的または到達目標」、「授業内容」に明記したとおり、教養基礎科目あるいは専門科目を担当している先生方の話を傾聴することで、受講生に自らの「感性」を発見し、それを意識することを狙いとする科目です。受講にあたっては、構えを捨て去り、心を平らかにし、先生方の話に謙虚に耳を傾けてほしいと願っています。 教室内での遵守事項 ①講師の話を傾聴する。 ②私語をしない。 ③携帯電話の電源を切って、かばん等にしまう。 ④無断で教室を出ない。 ⑤寝ない。 ⑥ほかの受講者の傾聴を妨げない。 上記が守られていない場合は注意をします。2回注意しても改まらない場合は教室から出てもらいます(欠席扱い)。				
教科書	使いません。				
参考文献及び指定図書	特にありません。				
関連科目	ヒューマンアート、異文化コミュニケーション				

授業の目的	私たちを取り巻くさまざまな「物」「事」には、「美しさ」や「面白さ」が秘められています。その美しさ、面白さを発見して感動できる心を、面白がれる心を「感性」と言います。 「感性」は『生きる力』のみなもと、「感性」は創造力の礎、「感性」は人生を美しく彩る力です。このような「感性」は、構えを捨て去り、素直な心で物事と触れ合うなかで育まれます。そして、先達の話に謙虚に耳を傾けることで、優れた芸術作品を見つめ続けることで、また、自然の中につましく身を置くことで磨きがかけられます。
授業の概要	感性学は、以下の4つ学びのステップで構成されています。それぞれのステップでは、本学教員がそれぞれ専門の立場から、感性について語ります。 ステップ1:感性の存在やその特徴を知る。 —自然体験:1回の自然体験レポートを含む ステップ2:感性を感じ取る。 —芸術体験:1回の芸術体験レポートを含む ステップ3:感性を磨く。 —中間レポートを含む ステップ4:感性を発揮する。 —最終レポートを含む 教養基礎科目、専門科目を担当する先生方から、それぞれの専門の立場から担当科目と「感性」とのかかわりをレクチャーしていただきます。 そして、日常生活の中で感性をどのように磨いていくことが出来るのか、また、専門領域に進むために感性をどのように生かしていけばよいのかを考えてもらいます。

○授業計画	
学修内容	学修課題(予習・復習)
第１週 : 知識が感性の幅を広げることを、実例から感じ取らせる。	身の回りの出来事に常に関心を持って見つめる。

第 2 週 : 感性の基礎となる感覚（視覚と聴覚）について、実験を交えながら学習する。	身の回りの出来事に常に関心を持って見つめる。
第 3 週 : キャンパス内を「初秋」をテーマに散策し、何が秋を感じさせるのかを考える。	身の回りの出来事に常に関心を持って見つめる。
第 4 週 : 古典文学作品（奥の細道）から汲み取ることができる作家の感性を考える。	身の回りの出来事に常に関心を持って見つめる。
第 5 週 : 芸術作品の鑑賞を通して、作家の感性と自らの感性について考える。	身の回りの出来事に常に関心を持って見つめる。
第 6 週 : 近代文学作品（銀河鉄道の夜）から汲み取ることができる作家の感性を考える。	身の回りの出来事に常に関心を持って見つめる。
第 7 週 : 異文化との交流の中で、感性がどのように活かされるのかを考える。	身の回りの出来事に常に関心を持って見つめる。
第 8 週 : 中間レポート作成:「私の感性を日常でこのように活かしたい」	身の回りの出来事に常に関心を持って見つめる。
第 9 週 : デジタル表現の中に活かされる作家の感性を学ぶ。	身の回りの出来事に常に関心を持って見つめる。
第10週 : 短編映像作品の鑑賞し、表現の中に活かされる作家の感性を学ぶ。	身の回りの出来事に常に関心を持って見つめる。
第11週 : 福祉の現場で感性がどのように活かされているのかを学ぶ。	身の回りの出来事に常に関心を持って見つめる。
第12週 : ビジネスの現場で感性がどのように活かされているのかを学ぶ。	身の回りの出来事に常に関心を持って見つめる。
第13週 : 感性を働かせるチャレンジ:４～５名でチームを作り、ACC学生CMコンクールへの出品を目標に、ラジオCMの作成にチャレンジする。	身の回りの出来事に常に関心を持って見つめる。
第14週 : CM制作第２週。	身の回りの出来事に常に関心を持って見つめる。
第15週 : CM制作第３週。作品完成と作品講評。	身の回りの出来事に常に関心を持って見つめる。
第16週 : 最終レポート作成:「私の感性を専門分野でこのように活かしたい」	身の回りの出来事に常に関心を持って見つめる。

授業の運営方法	（1）授業の形式	「講義形式」
	（2）複数担当の場合の方式	「共同担当方式」
	（3）アクティブ・ラーニング	
備考		

〇単位を修得するために達成すべき到達目標	
【関心・意欲・態度】	身のまわりのあらゆる「物・事」に興味関心を持つ。
【知識・理解】	「感性」について、見方や考え方を変えてみることや先達の話を傾聴することで「感性」を知る。

【技能・表現・コミュニケーション】	自らの「感性」を活かして
【思考・判断・創造】	「感性」すなわち、身のまわりのあらゆる「物・事」が心に与える直接の影響を受け入れる力について、見方や考え方を変えてみることで自ら発見したり、先達の話を傾聴することで気付いたりしてもらうことによって、自らの「感性」を意識できるようになる。

○成績評価基準（合計100点）			合計欄	100点
到達目標の各観点と成績評価方法の関係および配点	期末試験・中間確認等（テスト）	レポート・作品等（提出物）	発表・その他（無形成果）	
【関心・意欲・態度】※「学修に取り組む姿勢・意欲」を含む。			30点	
【知識・理解】※「専門能力〈知識の獲得〉」を含む。		20点		
【技能・表現・ｺﾐｭﾆｹｰｼｮﾝ】※「専門能力〈知識の活用〉」「チームで働く力」「前に踏み出す力」を含む。		20点		
【思考・判断・創造】※「考え抜く力」を含む。		30点		

（「人間力」について）

※以上の観点に、「こころの力」（自己の能力を最大限に発揮するとともに、「自分自身」「他者」「自然」「文化」等との望ましい関係を築き、人格の向上を目指す能力）と「職業能力」（職業観、読解力、論理的思考、表現能力など、産業界の一員となり地域・社会に貢献するために必要な能力）を加えた能力が「人間力」です。

○配点の明確でない成績評価方法における評価の実施方法と達成水準の目安	
成績評価方法	評価の実施方法と達成水準の目安
レポート・作品等（提出物）	［Sレベル］単位を修得するために達成すべき到達目標を満たしている。 ［Aレベル］単位を修得するために達成すべき到達目標をほぼ満たしている。 ［Bレベル］単位を修得するために達成すべき到達目標をかなり満たしている。 ［Cレベル］単位を修得するために達成すべき到達目標を一部分満たしている。
発表・その他（無形成果）	